

第1回 (仮称)練馬区地域コミュニティ活性化プログラム検討懇談会 議事概要

《日時・場所》

- 1 日時 平成23年4月27日 午後6時～午後8時
- 2 場所 練馬区役所本庁舎5階 庁議室

《次第》

- 1 開会
- 2 委嘱式
- 3 挨拶
- 4 委員紹介
- 5 座長・副座長の選任
- 6 議題
 - (1) (仮称)練馬区地域コミュニティ活性化プログラム策定の目的等
 - (2) 懇談会の運営について
 - (3) 懇談会の役割について
 - (4) 練馬区基本構想における地域コミュニティの捉え方
- 7 基調講演
地域コミュニティの歴史と現状〔首都大学東京教授 玉野和志〕
- 8 その他

《出席者》

大垣喜久江委員、岡田尚子委員、小川善昭委員、小美濃千鶴子委員、加藤政春委員、鈴木恭一郎委員、玉井弘子委員、玉野和志委員、浜屋光正委員、原秀年委員、樋口謙次委員、平田稔委員、堀武也委員、増田時枝委員、森本陽子委員、

(区出席者) 区民生活事業本部長、産業地域振興部長

(事務局) 地域振興課職員 5名

(傍聴者) なし

1 開会

事務局

- ・第1回（仮称）練馬区地域コミュニティ活性化プログラム検討懇談会を開催する。座長が決まるまで事務局が進行を務めることとする。次第に従い委嘱式を行う。

2 委嘱式

- 犬塚区民生活事業本部長より委嘱状を交付

3 挨拶

犬塚区民生活事業本部長

- ・お忙しい中、当懇談会の委員をお引き受けいただき、お礼を申し上げます。
- ・練馬区では平成21年12月に練馬区の基本構想を策定した。この基本構想を策定に向け練馬区がめざす10年後の姿を議論する中でも、地域の人と人とのつながり、地域コミュニティの活性化が課題となっていた。この基本構想での課題を受け、長期計画で地域コミュニティを活性化するためのプログラムを明らかにしていくこととしている。既に庁内ではプロジェクトチームを設置し、検討を重ねている。それと合わせて、地域活動を担われている団体の代表者の皆さまや、地域の中で生活をされている皆さまの意見やアイデアをいただきたく当懇談会を設置した。
- ・地域コミュニティの活性化には様々な側面があると思うが、地域活動がコミュニティを育成するとするならば、活動しやすい体制というのはどのようなものなのか、そのための区の役割は何か、どのような支援ができるのか、地域活動の担い手が高齢化する中で、人材確保をどのように進めていくのかなどについて、それぞれの委員が地域で感じていることをご議論いただき、庁内の組織の検討と合わせ、具体的な支援策につなげていきたいと考えている。
- ・こうしたことをご理解いただき、実りある会議になるようお力添えをお願いする。

4 委員紹介

- 各委員による自己紹介

5 座長・副座長の選任

事務局

- ・本懇談会設置要綱の規定では、座長は委員の互選となっている。ご意見をいただきたい。

G委員

- ・座長は、学識経験者である玉野委員にお願いをしたいがいかがか。

（各委員拍手により賛同）

事務局

- ・副座長についてはいかがか。

C委員

- ・事務局案があればご紹介いただきたい。

事務局

- ・副座長は加藤委員でいかがか。

(各委員拍手により賛同)

事務局

- ・座長、副座長より挨拶をお願いする。

座長

- ・練馬区のことや現場のことは各委員がよくご存知である。私は、違う立場で全体の議論をまとめていきたい。よろしく願いする。

副座長

- ・皆さんの力を借りていっしょに頑張っていきたい。よろしく願いする。

事務局

- ・それでは議題に入る。本来であれば、座長に司会・進行をお願いするところではあるが、本日は、玉野先生に講演をお願いしており、更に、事務的な事項も多いため、引き続き事務局で進行を行う。

6 議題

(1)(仮称)練馬区地域コミュニティ活性化プログラム策定の目的等

事務局

- 資料2の説明

事務局

- ・質問、意見があればお出しいただきたい。

(質問・意見なし)

(2)懇談会の運営、(3)懇談会の役割について

事務局

- 資料3および資料4の説明

事務局

- ・質問、意見があればお出しいただきたい。

(質問・意見なし)

(4) 練馬区基本構想における地域コミュニティの捉え方

事務局

- 資料5の説明

- ・ 資料5は、練馬区基本構想を策定する際の「基本構想審議会懇談会」において地域コミュニティを検討する際に用いた資料である。
- ・ 資料5の上段は、地域コミュニティを検討するにあたっての、地域活動の状況と地域の範囲の考え方を示した図である。第1層を練馬区全体、第2層を行政サービスの拠点として練馬区を3から7の地域に分けたエリアである。第3層は旧出張所の管轄地域や町会連合会の支部など地域のネットワークとして17から20の地域に分けたエリア、更に、第4層は町会・自治会や老人クラブ、学校区を単位とした学校応援団や避難拠点運営連絡会などを身近なエリアとして捉えている。この他にNPOやボランティアなど、エリアに関係なくテーマ別に活動をしている団体もある。
- ・ 今回の地域コミュニティ活性化プログラムでは、最も身近な第4層のコミュニティをどのように活性化していくかを考えていきたい。そのために、第3層や第2層への支援も検討していきたい。
- ・ 資料5の下段は地域コミュニティ支援のイメージ図である。この図は、区の支援のイメージを中心に示しているが、地域コミュニティの活性化には、区の支援だけでなく、地域の中での取り組みも必要であると認識している。
- ・ 一番左に区、中程に第3層、右に第4層があり、第3層と第4層にまたがるようにテーマ別活動を表記している。区からの支援という視点では、区から第3層、第4層、テーマ別活動へそれぞれ矢印が伸びている。この矢印で示す支援の中身を地域コミュニティ活性化プログラムの中で、明らかにしていきたい。また、第3層と第4層の間の連携も必要があるということで相互の矢印で示してあり、更に、テーマ別活動と第3層や第4層の活動も、場合によっては連携する必要があるということで、テーマ別の活動の楕円が第3層と第4層にまたがっている。
- ・ 地域コミュニティの検討の視点が左上の紫の四角の中に記載されており、「若い世代や、転入してきた人等がコミュニティ活動に参加しやすい仕組みづくり」「既存組織の活性化」「組織・人のネットワークづくり」「それぞれの地域にあったやり方がとれる仕組みの工夫」「地域の調整役となる人材の発掘・育成」「既存の地域施設等の有効活用」が挙げられている。また、区の支援の柱として水色の矢印の先の四角の中に記載されており、第3層へは「区と地域をつなぐ窓口」「組織間の調整」「相談・情報提供」を担う人材の確保と、団体間の「ネットワークづくりの場と仕組み」の支援の検討が必要であるとしている。第4層へは「地域の人同士をつなぐ調整役」身近な地域での「相談・情報提供の入口」を担う人材の確保と、既存施設の使いやすさを含めた活動の「拠点」の支援の検討が必要であるとしている。
- ・ この図で示したような地域コミュニティのイメージをもって基本構想や長期計画が策定

されていることをご理解いただき、懇談会での検討をお願いします。

事務局

- ・今説明した資料は、基本構想を策定する際の検討の中で示された資料である。次回以降、懇談会での検討を進めるにあたっては、この検討資料の中身も含めてご議論をお願いします。

7 基調講演

- 地域コミュニティの歴史と現状〔首都大学東京教授 玉野和志〕

(講義の要旨)

講義、講演というのではなく、懇談会の最初の発言のような感じで聴いていただき、この後に意見交換をして、次回以降の検討を組み立てていく題材にしていただければと考えている。簡単なレジュメを配布しているが、このレジュメに従って話を進めていきたい。

私は、たまたま調査した地域、または学会等の講義や状況報告、あるいは他の人の研究の成果を見ることがある状況の中で、具体的にはいろいろな地域の現状を学び、大まかな流れとしてこのような状況であろうということを整理する仕事をしている。本日はそうした観点から、地域コミュニティをめぐる過去から現在に至って、どのようなことが論点になって、どのようなことが検討されてきたのかをおおまかに振り返り、最近このようなことが問題になっているようだという話をする。最初に断っておくが、この話はあくまでいろいろな地域での研究・検討を踏まえて、どうも「そうらしい」という話であり、大事なのは、練馬区が今どうなのかということである。それは、委員の皆さんがきちんと捉え、今練馬区としてどのようなことが活性化として重要かを検討することである。必ずしも私の話を聴いて、「だからそうなのか」と考えるのではなく、そういう流れの中で練馬区がどこにあって、今どのようなことが必要なのか、ひょっとしたらこれからお話しする「今こうゆう状況らしい」という話より、ちょっと前の状況で考えたほうが良いのかもしれないし、それよりももっと違う状況になっていると考えたほうがいいのかも。そのようなことを考える一つの前提として聴いていただきたい。

レジュメの(1)(2)は戦前のことであり、あまり長く紹介する必要がないと思う。大事なのは戦後である。日本の地域社会では、戦後、自治会・町内会が、良かれ悪しかれ大きな組織として力を持って様々な貢献をしてきた経緯がある。もともとは町会という言い方が正式であったと私は考えているが、町内会という言い方が出てきて、戦後は、自治会という言い方が出てきて、町内会・自治会と総称していた時期があった。最近では、自治会・町内会と言っている。もちろん、練馬区でどういう言い方が一番ピッタリくるかはあると思うが、いずれにしても自治会・町内会にあたる組織が非常に大きな力を持ってきた。では、自治会・町内会がいつ頃から出てきたかということを確認する。自治会・町内会の成り立ちについては、いろいろ言われてきたが、大正期か

ら昭和の初期ごろ、1900年代初めぐらいから戦時体制の中で確立してきた組織であると考えていいとは思っている。実はそんなに古い組織ではない。少なくとも前近代的組織ではない。ただ戦後、いろいろな意味で前近代的な封建威勢だとよく言われた時期もあり、その時代のことをよくご存知の方もいるとは思いますが、よく調べてみると、大正期以降の日本のとりわけ東京などの都市化が最初に起こった、近代化が最初に起こった頃に新たにできた地域住民の組織形態であった。それでは、この組織がどういう意味で新しいのかというと、その前を考えることが必要であり、それがレジユメ（1）である。

幕末から明治の初めにかけての地域社会は、都市も村落も、隣組とか五人組とか言われるものがあり、それが自治会・町内会の前身と言う人もいたが、実は五人組と言われたのは、ちゃんとした一軒前の店や土地を持った人が5人集まった組織である。落語の話で大家と店子で例えると、大家が5人集まった組織であり、店子は関係がなかった。町内会とは、ある特定の地域に住んでいる人が全員というか全戸入るのが前提の組織である。全戸入っているかどうかは別として、入るのが望ましいと考えられている。このように住んでいる人全員が参加できる場というのは、町内会が現れる前には存在しなかった。大概是、土地や店を持っている人だけが、地主会などのような形でまとめ、当時の政府もその組織と連絡をとっていた。江戸時代も町年寄のような組織があったが、あくまで大家だけの世界であって、店子までは見ていなかった。その後、近代の都市化が起こり、誰が隣に越してくるかわからない、あるいは地主だけでなく、地主の土地を借りて営業をしたり、そこで暮らすようになっていたりしている人も含めて、町の問題を考えなくてはならないとなったときに、いろいろなきっかけの中で、地域の中で全戸加入の組織、いわゆる地主さん以外の人が活躍する組織が町の会、町会という形で始まったのが最初だろうと思う。その後、いろいろなことはあるが、端的にこの特定の地域で全戸加入によって出来上がった町会のモデルのようなものが、当時の戦時体制という特殊な歴史的状況の中で、自治体や政府によって採用され、国家によって全国一律に整備されていったという事情がある。これには、部落会・町内会整備要綱があって整備したわけであるが、その結果、戦後、どこに行っても町内会・自治会があるという状況が生まれた。こうしたことが、戦後の時代が始まる前までである。

戦後、GHQが来て、日本を民主化していくときに、GHQが自治会・町内会という組織は、日本の民主化を阻むものだという評価をして、これを解散させるという政策を採ったことから、自治会・町内会は、古い組織、封建威勢であり、これから無くしていくべきものであるとされ、GHQがいる間は禁止されていた。

その後、講和条約ができその禁止が失効して、自治会・町内会が全国でどんどん復活していく。とんでもないことがまた復活するということで話題になるなど紆余曲折したが、実は、自治会・町内会が新しい組織だったというのは、その後の歴史が証明したと思う。1960年代・70年代になっても自治会・町内会が無くなるどころか、どんどん力を蓄えて、どんどん行政との間での制度的な関係が整えられていった。練馬区がどうなっているかわ

からないが、よくあるのが行政協力員制度といって、地域で行政協力員を選出し、その人たちにいろいろ広報をしてもらったり、いろいろな委員を選ぶときに窓口になってもらったり、場合によっては年に1回首長と懇談会をもって行政に対して意見を言ってもらう。この行政協力員が事実上、自治会・町内会の会長になるとこの役になる。条例に自治会・町内会の会長が行政協力員になると明記している自治体もあれば、明記せずに慣行として行っているところもある。あるいは、連合町会の会長が委員になっているところもあれば、自治会長とは別に自治会・町内会が推薦して委員になっているところもあり、自治体によって様々である。このような形で地域を代表して、行政にものを言ったり、あるいは協力したりする組織として、公認されていったという事実がある。こうしたことを私は町内会体制と言っているが、おおむね60年代から70年代にかけて暗黙のうちに整備されていった。その背景には、町内会・自治会を今よりも積極的に支えようという住民がいた。それは、地域で商売をやっているような自営業者の方々である。80年代になると、都市部では、そのような事業形態が非常に難しくなってきたり、一世代終わって跡取りがいなかったりして、少なくなってしまうが、70年代ぐらいまでは、戦後の復興の中で、自力で一つの商売を始めて、それなりに自営業者として成立する基盤があった。今みたいに、大型スーパーマーケットなどがなく、日用品の購入は、町の商店が担っていた。あるいは、工業地帯のようなところでは、町工場がたくさんあって、下請けという形で日本の経済を支えていた。町に関わるのが、自分の商売と利害関係があり、それほど無理もなく、また当時の自営業者は、ちょっと余裕もあった。今では、自営業者も会社のサラリーマンも余裕がなく、我々大学教授もだんだん忙しくなっている。そのような条件もあり、町内会を支えてくれる人材も今と比較すると豊富に存在していたことで、60年代70年代までは、町内会体制、町内会を中心に行政と住民をつないでいくというやり方が、比較的うまくいっていた時期ではないかと思っている。もちろんその間に、ところどころ市民運動、住民運動が起こり、こうした運動が起こった時に、自治会・町内会が住民運動の味方をするか行政の味方をするかで、いろいろあった時期もあるが、全般的には60年代70年代の高度成長期は、町内会を中心として地域をまとめるというやり方が、それなりにうまくいくという時代であった。これがレジュメの(3)のところである。

70年代から80年代にかけて、これが徐々に変わっていくことになるが、一つは、練馬区は微妙な位置にあるが、都心の中心部から徐々に郊外へ人口が流出して郊外化が始まったことである。郊外の住宅地というのは、70年代から80年代の頭にかけて、都心から新しい人がどんどん入ってきた。しかし、そこには昔から住んでいる地主の家も何件もあり、その人たちが作っていた自治会がある。そのような場所に新住民がたくさん入ってきたらどうなるか。新住民は今みたいに個々に入ってくるわけではなく、一挙に入ってきて団地ができたので、新住民で独立をした自治会を作り、いろいろ特色がある活動を行い、積極的に地域に関わり始めた。特にPTAを中心とした活動では、学校にごそっと入る人は新住民であるが、PTAの会長は、昔から住んでいる人で、PTAが古い慣行でやって

いたところに、戦後民主化世代の人が大勢入ってきて「そのやり方はちょっと違うのではないか」というようなことがあった。この時代、とりわけ大都市の郊外の部分で、かなり大きな人口の移動と地域の変動があった。こうした社会状況の中で、新住民と元からいた旧住民とを町内会では上手く媒介できず、同時に市民活動団体などが出てきて、それらをどのように調整するかということが、地域によっては非常に大きな問題となったのが70年代の終わり頃である。このときが(5)のコミュニティ施策とかコミュニティ行政と言われた時代である。詳しくは紹介できないが、1968年に国から「コミュニティ 生活の場における人間性の回復」という報告書が出て、それに基づき、1969年に当時の自治省が全国にコミュニティ政策をやり始めた。その頃から70年代後半にかけてのコミュニティ政策は、今でいう「協働」と同じで、どこの自治体でもコミュニティ行政が盛んに行われた時代であった。これは、都市化が激しかった地域では新住民と旧住民が町内会という中ではまとまりきれなく、市民活動団体もどんどん出てきて、どうしようかという時にみだりに、特に地域で必要だった政策であった。このコミュニティ政策で、コミュニティセンターと言われる身近なコミュニティレベルの集会施設をどんどん建設した。これがある種の支援の仕方だった。特徴だったのが、このコミュニティセンターを地元の人たちが管理運営するという提案がされたことである。これを旧来からの自治会・町内会にお願いをした地域もあれば、自治会・町内会もその一つの団体として、様々な団体が参加した新しいコミュニティ協議会や組織を作り、その組織が施設を管理運営するという工夫がなされたところもあった。この政策は、都市の中心部のコミュニティが崩れていた地域と、郊外の人口流入が激しく町内会ではまとまりきれない地域では必要であったが、皮肉なことは、関係ない地域でもコミュニティ施策を行ったため、地元の現実をちゃんと見てないような自治体では、自治会・町内会で十分対応できているにも関わらず、新しい組織を作って、自治会・町内会の力を削いでしまった、あるいは、自治会・町内会に嫌われてしまった自治体もあった。

しかしながら、ほとんどの自治体では、コミュニティ政策として新しい住民組織を作ることを言っていたが、結局は自治会・町内会で対応できそうだとすることで、自治会・町内会が中心になるよう組み替えた自治体はかなり多かったと思う。地域によっては、市民活動団体の力が強い地域もあったので、そうした自治体では、実際に市民活動団体と自治会・町内会がいっしょになって、いろいろなことをできるようになった。だからといって、市民活動団体と自治会・町内会が仲良くなるということではなく、ある時期から、行政が別のグループを作り、市民活動団体を担当する部署と自治会・町内会を担当する部署を別にし、直接、市民活動団体と自治会・町内会が交渉するのではなく、行政に力を結集するような形でまとめていくようになり、この方法が一番上手くいくということで、この頃のコミュニティ政策は結論が出たと私は理解している。

レジュメ(6)のコミュニティ行政の成果かどうかわからないが、80年代から90年代初めは、やっぱり自治会・町内会でいいということで、自治会・町内会を制度化する動きが

あった。その一方で、コミュニティセンターを建設し、身近な場所で集会ができ、市民活動ができる場を作ったことは、市民活動団体にとっては非常に大きな支援であった。1995年に阪神・淡路大震災が起こり、多くのボランティアが結集したが、これは、70年代から80年代のコミュニティ政策で、身近に利用しやすい施設ができ、そこを拠点として小さな様々な市民活動団体が少しずつ増えていったことが背景にあったからだ、私は評価している。コミュニティ政策はいろいろ言われるが、一つは、自治会・町内会がある程度あてになることが明らかになったこと。もう一つは、身近な施設の建設を通じて、現在のボランティア団体やNPO団体の母体となる市民活動を支援したことが大きな成果であったと私は思っている。

このような経緯で80年代終わりから90年代初め、バブルが崩壊する前ぐらいまでは平和な時代で、いつの間にかコミュニティを誰も言わなくなった。

この後、90年代後半ぐらいから現在に至って問題になってきたのが高齢化である。いよいよ自治会・町内会の担い手が枯渇してくるのではないかと最近は言われている。これがどの程度の範囲で言えるかはわからないが、一昨年あたりから、自治体から地域コミュニティに関する講演などの依頼を受けることが多い。依頼先は町田市、立川市、八王子市、東久留米市などであり、今までは、自治会・町内会で十分対応できた東京の周辺部から、急激に難しくなってきたということで、それに関する講義等の依頼が増えている。昨年、立川市で少し調査を行ったが、70年代から80年代のコミュニティ行政の頃には、まだまだ自治会・町内会が弱くなかったので、コミュニティといいながら、自治会・町内会を中心としたやり方を継続していた地域である。継続できたということは、自治会・町内会もそれなりに組織力や活動力があつたが、こうした力があつた故に、長い間行政が依存してしまつたため、あまり支援をしなかつた。立川市では、5年ぐらいで8割程度あつた自治会・町内会の加入率が5割を切っている。これに立川市では危機感を感じ、少しお手伝いをしている。このように最近では、自治会・町内会でやってきたやり方がいよいよ厳しくなつてきている。これには、高齢化ということと自治会・町内会を積極的に支えていた町の商業や工業の衰退が大きく関わっている。団塊の世代が首尾よく地域に戻ってくればいいが、これがなかなか難しいと言われている。この問題はこの懇談会でも検討すべき重要な課題だと思うが、どうもその辺が大きな変化のようである。もちろん、冒頭述べたとおり練馬区で今どうなのかということは、この懇談会で考えていくべきことであるが、どうも自治会・町内会の旧来のやり方、旧来の考え方で地域に貢献してきた人たちが高齢化し、忙しくなり、少なくなつてきた。これと反比例して成長してくるのが市民活動団体やボランティア団体などのテーマ別に活動している人たちである。この人たちが、どの程度地域に関心があるかは非常に難しい問題であるが、いずれにしても、社会的に活動している人たちが量的・質的に確実にどんどん増えていると思う。

こういう状況であるから、最近よく聞かれる課題が協働、レジユメ(8)の協働の時代ということになるが、協働ということでもう一度地域のつながりをつくり直そうというこ

とが出てきた。この協働には二つの内容がある。協働が出てくる背景には、一つは自治会・町内会が高齢化してきた事情にも関わらず、市民活動が広がってきたということ。もう一つは、過去のコミュニティ政策の際には、行政は地域に建物を建てることができた。箱物だという批判もあるが、ある程度お金をかけて建物やサービスを提供することができた。しかしながら、90年代以降、一般的には財政が厳しくなり、行政がいままでやっていたことを、肩代わりしてもらわざるを得なくなってきた。もちろん、税金を増やして今までどおり行政にやってもらう方法もあるが、どうも上手くいかないの、みんなで少しずつ手間を出してやってもらうということになった。従って、協働という中には、行政と住民が協力するという側面と、住民の様々な団体同士が協力するという側面がある。行政は、あわよくばボランティア団体などと自治会・町内会が仲良くやって、行政はフェイドアウトできればいいと思っていることに、注意をしなければならない。もちろん、その時の練馬区の財政状況等を含めて考えればいいと思うが、行政とテーマ別の住民と自治会・町内会の住民とが、それぞれの役割を組み合わせながら、以前よりもそれぞれが上手くやっていくかが、今課題になっている状況である。

更に言うと、財政状況が非常に厳しく、課題がはっきりしているのは、東京都以外の地方である。とりわけ中国地方の限界集落と言われる地方とか、市町村合併をして財政的に厳しい地方、あるいは、あえて合併をしなかったが財政の問題が残っている地方などは、行政も民間も含めてみんなで町の生活を守るためにどのように分担しようかということで、課題がはっきりしていて、ある意味非常に面白い試みが行われている。私のような仕事をしているものは、実はそのようなことに関わることが楽しいが、私も東京都の大学にいるため、逃げるわけにもいかない。

東京都の場合は、財政的にはまだそうした地方の状況にもない。しかし、考えなければならない。地方は、古い関係が残ったりしているので、それをもう一度活性化するという形で課題がはっきりするが、東京の場合は、その関係が微妙で難しい。新しい人たちが出てきてはいるが、古い人たちと上手く連携できるかが難しく困難を抱えている。また、最近ではインターネットやソーシャルネットワークサービスなどから人がつながる部分も出てきている。これが、面と向かって人がつながるところとつながるのか、あるいは、つながりたいと思っているのかという課題も含めて、もう一度地域のつながりを捉え直し、生活を豊かにしていくことを考えなくてはならないということが、とりわけ東京の郊外も都心も含めて、でてきているようだと思っている。

以上が、私の全体的な印象です。これからの議論の参考になればありがたい。

事務局

- ・ありがとうございました。
- ・先生のお話を聴いた中で、地域で活動している委員の皆さんの意見を伺い、次回以降の検討の材料としていければと考えている。

B委員

- ・私が生まれて約70年。同じ場所に住んでいるが、西大泉でも先生の話と同様で、一次は本当に良かったが、だんだん都市化が進み、商売をしている人が少なくなってきた。新しい人が引越してくるが、町会には入らない。また、高齢化も進んでいる。
- ・以前は区からの支援がなくても町会の運営はできたが、今は支援がないとできない。いろいろな支援をいただいているが、地域が活性化する状況にはならない。
- ・一番の問題と感じているのは、昔のような向こう三軒両隣が完全になくなっている。新しく住宅ができて、勧誘にいくと「自分たちの家は関係ない」と言われる。戸建住宅で160戸新たにできたが加入したのは20世帯だけだった。その20世帯は子どもが学校に行っている関係で町会に加入した。
- ・私は学校応援団もやっているの、学校との関係もある。PTAの皆さんへは、町会への加入をお願いしているが、なかなか加入してもらえない。逆にPTAの方からは、町会が高齢で仕事がない人が多いのだから、子どもの学校の送り迎えをして欲しいと言われる。
- ・私たちの町会は、加入率が3割程度であるが、地区祭や盆踊り大会を行っている。そうした時は、町会に加入していない皆さんもたくさん来てくれる。その時は、一時的につながりを感じるが、その後は、全くつながりが無くなってしまう。いろいろな機会を通じて、町会への加入をお願いしているが、非常に難しい。
- ・地域のことなので、学校やいろいろな団体と連携をとらなければならないと思っている。特に高齢化が進んでいるので、若い人たちに町会に加入していただき、活躍してもらわないと活性化しない。
- ・3、4年前から町会新聞を1か月おきに作って、町会がどんな活動しているかをPRしている。また、練馬区町会連合会でホームページを作ってもらったので、ホームページでもPRしているが、なかなか加入につなげるのは難しい。
- ・古紙の回収を始めたが、非常に好評で、町会に入っていない人も協力してくれる。こうしたことは、非常に重要であるので、これからも積極的に関わっていきたい。

事務局

- ・参考までに、練馬区の町会・自治会の加入率を申し上げる。統計を取り始めた昭和53年度には、練馬区の全世帯数203,670世帯に対して、町会・自治会の加入世帯数が128,940世帯あり、加入率は63.31%であった。平成22年度には、全世帯数が333,951世帯に対して、加入世帯数は139,813世帯であり、加入率41.87%という状況である。加入世帯数は増えてはいるものの、全世帯数の増加が大きいので、加入率は年々減少傾向にある。

C委員

- ・私たちの町会は練馬の一番外れ、地図で見ると碁盤の目のようになっているが、昔から新住民も旧住民もいっしょの一つの町会である。隣の町会は、別々になっている。私たちの町会では、何代か前の町会長が、後から住むようになった人も、前から住んでいる

人も区別なく、皆で一緒にやろうということで、一つの町会でやっている。それでも加入率は43%ぐらいである。

- ・今回、東日本大震災があったためか、最近、町会へ加入したいという話 coming。町会の加入率向上については良いことだが、震災がきっかけであるとするれば、寂しいところがある。

P委員

- ・活性化している地域コミュニティとは、どういう状態を指すのか。区の考えている「活性化している地域コミュニティ」の具体的な状態があれば、例として紹介してもらいたい。ここでは、地域内団体のことをコミュニティとして指していると思う。例えば、町会・自治会であったり、商店街であったりということになると思うが、その団体について活性化している状態という例があれば、紹介してもらいたい。
- ・なぜならば、自分が住んでいる70戸程度の団地では、自治会に入っていない。管理組合はあるが自治会はなく、いわゆる自治会的な活動は一切行っていない。それでも、比較的良好に近隣関係が上手くいっていると思っている。こうしたことを目指しているとは思わないが、活性化している地域コミュニティについて、事例があれば、紹介してもらいたい。

座長

- ・区は区の都合でこのようにして、こうなって欲しいということはあると思うが、検討懇談会では、各委員が活性化とはこのようなことではないかということを出し合い、イメージを作っていくことが大切である。その議論の中で行政の立場でも意見を言ってもらい、それらを含めて一緒に議論をしていけばよい。

O委員

- ・P委員は、活性化された地域コミュニティについて、どのようなイメージを持っているか。このようになればいいかと理想とするところはあるか。

P委員

- ・そのイメージはない。
- ・しかし、実際に地域で見ていると、町会・自治会に入ろうという気が起こらないという事実がある。町会・自治会を一つの地域団体として見た時に、そこに入って活動したいと思うような団体になったらいいなと思っているが、今は、そのような団体になっていない。ただし、自分が所属している団体の活動では、町会には助けてもらい、自分たちの活動を町会の皆さんに紹介してもらった。そういう意味では、その町会は地域の方々とコミュニケーションが取れていると感じている。

座長

- ・今聞いていて思うのは、そうしたことがイメージである。つまり、みんなが町会に入っていることが活性化ではなく、入る入らないに関係なく、その地域の人が、それなりのつながりを維持し、必要なことをやり、何かあった時にはまとめられる要件がある。こう

した状態が活性化であるという意見として聞いていたが、そういうイメージで良いと思う。

- ・ある地域にとっては、古い地域で伝統がある町会があり、そこに住んでいる人にその古さとか伝統を理解してもらい、できる限り町会に入ってもらって活性化しようというところもあれば、こうしたことがなく、それぞれが好き勝手にやっていて、でも最低限のつながりを持っていて、何かあった時には町会とも協力するし、行政とも連絡がとれるという状態になっているのが活性化であると考えても良いと思う。
- ・こういう話をすると、町会に入ることが活性化であるということになりがちだが、町会も嫌々入ってもらっても困るわけで、入ることが楽しいとか良いと思う人が入っていて、それが昔のように8割9割という時代では無くなったのだから、3割から4割の人がそこで生き生きして、それで足りない分を別の団体が別の形で行い、それが緩やかにつながっていて、場合によっては、行政が両方をつなげるやり方もあるかもしれないし、あるいは、インターネットでつなぐというやり方もあるかもしれない。活性化のイメージとして、地域ごとに活性化のイメージが違ってよい。
- ・町会を中心にまとまっていったというのが、かつてのあり方だった。しかし最近、これだけでは駄目になってきて、他にどういうことがあるかという方向で、いろいろなイメージを出せば良い。そういう意味では、P委員は一つのイメージを出していると思う。

G委員

- ・嫌な人は町会に入らなくても良いという発言があったが、老人会や町会では、入っていただき、良さを分かってもらうのが団体の仕事だと思っている。今、比較的コミュニティが機能しているのが老人クラブである。今の高齢者は、皆さんからお世話になるだけではない。町会や区に対して、積極的に協力をしている。
- ・先生の講義の中に東京都で課題のある老人クラブの自治体の話が出てきたので関心をして聞いていた。私たちが随分悩んだが、今は、みんなで力を合わせてやっている。これからは、町会と同じで組織も段々小さくなっていくので、もっと広げていきたいと思っている。

E委員

- ・私は地区区民館の運営委員会の会長をやっている。会議に来る前に、地区区民館の館長と話をしてきた。私たちの地区区民館の地域の範囲には3つの町会が入っていて、3つの町会の会長を巻き込みながら行事とか顧問としてお手伝いをしてもらっている。
- ・これからの地域コミュニティを考える時に、立派な町会会館を持っている町会もあるが、やはり地区区民館を核として、その範囲の町会と協力してやっていかなければいけないのではないかと考えている。いろいろな行事をやっているが、もちつき大会は小川会長に全面的にお手伝いをいただき、親子で250人くらいが集まった。その他、敬老の集いや子ども向けの行事など、様々行っている。そうした中で、何かの団体というのでは

なく、不特定多数の人を仲間に入れて行事を行い、行事を通じて人と人とのつながりが広がっていけば良いと考えている。

O委員

- ・高齢者の方はすごいエネルギーを持っている。これから町を活性化していくのは高齢者の方ではないかと感じている。高齢者の方は自己実現意欲が高い。
- ・地域で活動していて、町会だけとか、老人クラブだけとか、地区区民館だけとかいった単独で何かをやるというのは、活性化に結びつかないと感じている。一番大事なのは、これら団体をコーディネートする役割を担ってくれる人を育てることだと思っている。

G委員

- ・学校から、町会から、老人から、いろいろな団体をまとめている人が委員にいたので、意見を伺いたい。

M委員

- ・私もサラリーマンの時は、卒業した学校や町会・自治会に興味がなかった。たまたま、私が専業主婦で、妻が働くことになり、子どもを育てた。それでPTAの会長を3年間やり、その後、民生委員がまわってきた。
- ・学校を中心としたまちづくりのシンポジウムを練馬区教育委員会と防災会の主催で、豊玉小学校でやったときに出席した。その時にある先生が言っていたことであるが、「小学校は子どもがいれば誰でも行くところであり、学校というのは地域の花である。」と。私もその意見には賛成で、校長先生や副校長先生にも「学校が輝けば地域が輝く」とよく言っている。
- ・中村小学校の練馬区で唯一の校庭全面芝生事業に、最初から6年間携わってきた。最初は、「芝生と子どもの教育のどちらが大事か」ということもあり逆風だったが、ちょうど今年の6年生が1年の時に工事が始まって一巡したので、最初から芝生の校庭で育った子どもたちだけになった。そこで、今度は芝生を使って何ができるかを考え、防災キャンプを行った。今までは、避難拠点というと町会がやってくれるだろうと思われてきたが、私たちで芝生を使って何ができるだろうと考えた時に防災キャンプであった。起震車を入りに置き、煙体験の場を作り、テントを持ってきて芝生にテントを建てた。今のお父さん達はアウトドア派が結構多く、その人達を中心になって、やってくれている。町会の重鎮たちにも「カレーライスを食べにきてください。」と声を掛けた。終わった後に反省会と称して集会所で一杯やる。その時に区役所の方も呼んでやるが、そうすると顔がつながるということで、上手くいっている。
- ・50歳を過ぎた人に声をかけている。60歳になって時間ができて地域に出ようとしても、なかなか難しいから、55歳を過ぎたら助走を始めたほうがいいと言っている。地区祭など年に2回くらい手伝ってみませんかとお願している。何人かとは一緒にやって、終わってからビールを飲んで、顔つなぎをやっている。

事務局

- ・先生の話の中に、インターネットの話題があったが、そのあたりについて意見はないか。

K委員

- ・NPOの立場で出席をしているが、先生の話の中で、町会・自治会から新しい活動団体にコミュニティがシフトしているという話があった。まだ、あまり整理ができていないが、時代が変わっているので、70年代80年代の非常に活性化したコミュニティをそのまま取り戻すことはできないと思う。そうすると今の時代に即したコミュニティがあると思う。自治会がなくてもコミュニティだという話もあった。もう少し、皆さんの意見を伺いながら考えたいと思う。

O委員

- ・町会や老人会、PTAなども大切だが、時代に即した活動をしているのは、テーマ別活動の団体ではないか。この団体の人たちは、ものすごいエネルギーを持っている。例えば、私が携わっている認知症予防推進員の方たちは、いろいろな施設に出向いて認知症予防の体操を指導したり、紙芝居を読んだり、交流をしたりしている。また、区の事業であるが、認知症を介護している家族の支援も行っている。町会にばかり頼っていても限度がある。町会は地域の防犯、防火、防災の活動をしっかりやっている。これだけ多様化した社会において、すべてを町会に押し付けても無理である。時代の流れに即したテーマで活動している人達がたくさんいて、地域を活性化している。その活動は目立たないが、一生懸命活動している。こうした団体と町会・自治会や民生委員、地区区民館などが結びついて、一緒に活動できるように、コーディネートしてくれる人材が必要である。区には、こうしたコーディネートをする人材をたくさん育てて欲しい。

R委員

- ・この議論の最終形態は、活性化プログラムに対する懇談会での成果物を出すということであると思う。
- ・各団体の皆さんのご意見は、各委員の立ち位置で活性化そのものを中心人物として行っていると思うが、その他大勢は、そもそもコミュニティが必要なのかという議論とか、必要性を感じない、あるいは個人の幸せ感というような議論とかを並行してやっていると、なかなか見えてこないものがあるのではないか。
- ・最終的にどこまでのものを出していかなければならないのか。例えば、プログラムとして個別のものも出していくことが求められているのか。議論の深め方と最終形態のあり方を明確にしてから議論をすれば、今後の各回の議論もかみ合ってくるのではないかと思う。
- ・先生の話にあったが、ここ何十年かの間で課題、問題が非常に多様になってきた。地域自体も見えないし、コミュニティへの参加も含めて意欲を感じない。これは、大人だけでなく子どももそうだと思う。組織には馴染まず、個人や核家族といった単位だけという生き方があまりにも強くなってしまって、支え合うとか、関わり合うとか、会話を

出す・つなく、関係性をもっていくということに煩わしさを感じる人が多くなった。それで、孤立していく、個の中に閉じこもる人が多くなるが故に、昔はなかった問題が多様な場面で、成長過程のあらゆる段階で出てきてしまった。そうした問題をどうやって解決するかというと、解決策は一つではないと思う。年齢ごとに対応していかなければならない問題があり、幼少期、義務教育段階、あるいはまた大学生の夢を持たない、何になりたいかわからない、仕事自体の意義とかが薄らいできた中で、どこから手をつけた方が良いか非常に問題であるが、もう一度それをコミュニティの関わりの中で、他人、個人以外の何かにエネルギーを傾けさせる方向性が必要であると思う。そうした時に、この活性化のプログラムは、年齢ごととかテーマごと、テーマといっても教育とか、環境とか、福祉とか、防犯とか、防災とかいう内容別の違った切り口で、もう一回マトリックスを作るというのも一つではないかと思う。そうすると自分はこのテーマで中心となってもう少し人を集められるとか、地域に参加者が多くなるような、あるいは関心を持つ人が多くなるような動き方ができるとか、そうした自分のテーマにあった縦軸横軸の中で、支援をしていく、時間を割いていくような見え方もできてくるのではないか。そのような議論をしていくと、プログラムとして具体的なものが全部の分野で全部出てくるとは思わないが、一つか二つやってみる価値があるというものが出てくるのではないか。

そうした青写真というか、限られた時間の中で、議論を集約させるような動きが大切ではないかと感じた。今までの委員の皆さんの意見は全くその通りであるが、意見を言って終わりではなく、形にしていく作業が必要ではないかと思う。その作業を議論とテーマとを深める中でできれば、会議の2時間が意義ある時間になるのではないかと感じた。

○委員

- ・その辺りは座長が判断して進めていけば良いのではないか。最初の1回や2回はフリートークも大事だと思う。最初からこの路線、このテーマで皆さん考えていきましょうといっても、なかなか難しいのではないか。
- ・座長が整理をしながら、最終目的を達成できるようにコントロールしてくれると思っているので、安心している。

座長

- ・もちろんその役割はあるが、事務局としての今後の予定や見通しを紹介してもらい、それから、最終の提言につなげていく道筋を整理したいと思う。

事務局

- ・本日の会議では、先生の講義を聞いたうえで、皆さんでフリートークしてもらいながら練馬の現状の認識をし、その意見を踏まえ、2回目以降に地域コミュニティのあるべき姿等をまとめていきたいと考えている。進め方については、座長にお任せするとともに、区としての考え方についても、適宜出していくが、まずは、地域の現状の認識と、それに対して何ができるかを議論してもらいたい。

- ・本日の各委員からの意見をまとめ、各委員が感じている問題を次回の資料として出していく。

座長

- ・本日の会議で、いくつか論点が出たと思う。それを事務局で整理してもらおう。それから、今後どのような日程で会議を開催し、どのような手順でまとめていくかを整理する。次回、どういう手順で議論し、提言までもっていく道筋を提案し、それに沿って進めていきたい。ただ、次回は今日発言できなかった委員も含めて、もう少しフリーで話してもらい、それを踏まえて、3回目以降こうした手順でまとめていくということで良いか。

(異議なし)

- ・今日のまとめを事務局にしてもらい、それを見て私の方で考える。また、まだいくつか他に論点もあると思うので、次回に発言をしてもらいたい。

事務局

- ・必要な資料などがあれば、事務局で用意するので、申し出いただきたい。

座長

- ・今日の話に出なかったが、このようなことも考えるべきではないかとか、このような議題も入れて欲しいとか、こうしたことについて話を聞く機会を設けて欲しいなどの意見があれば、早めに事務局にお知らせいただきたい。こうした意見も踏まえて、論点を整理し、次回提案させていただく。

8 その他

事務局

- ・次回の会議は、5月下旬から6月上旬ぐらいを予定している。日程が決まり次第、お知らせする。
- ・以上で第1回の懇談会を終了する。